

目次

- 2 **巻頭エッセイ**
技能審査の成果に基づく単位授与制度
- 4 **過去問に学ぶ**
簡体字を正確に(続)
- 6 **語彙をふやそう**
教育・学習
- 8 **看图学惯用语**
絵で見る慣用語(5)
- 10 **紛らわしい文法表現**
“一A, 就B”と“刚A, 就B”
- 12 **中国語語彙学習の話**
字から詞へ
- 14 **新しいことばと古いことば**
数字語を覚えよう(続)
- 15 **読者の広場**
日中の文化交流の架け橋を目指して
- 16 **編集後記**

発行 一般財団法人日本中国語検定協会

本誌掲載の記事, 写真, イラスト等を無断で複製・
複写・転載することを禁じます。

技能審査の成果に基づく単位授与制度

日本中国語検定協会評議員・大手前大学 高村麻実

「中検合格で単位がとれる。」あえて学生風の言い方をしたが、その賛否はともかく、多くの大学でこのような制度が設けられている。高等教育制度の弾力化と、大学における学習機会の多様化を図る目的で、平成3（1991）年に定められた制度である。対象とされている検定試験（正式には「技能審査」という。）として圧倒的に多いのはTOEFLやTOEICを中心とする英語の試験だが、中国語の検定試験の結果に基づき、合格した級に応じた数の単位が与えられる大学・学部もある。「中検」の結果に基づいて卒業に必要な単位が与えられるならば、学生は積極的に「中検」を受験するであろうし、合格してもさらに上の級を目指すであろう。なによりも授業時間外の学修を促すことになり、教育的な効果が大いに期待できる。

しかし、どのような方法で単位を与えるかについては、大学によってさまざまである。ある大学では、「中検」の準4級に合格すれば「中国語Ⅰ」、4級に合格すればさらに「中国語Ⅱ」、3級に合格すればさらに「中国語Ⅲ」の単位が与えられるというルールになっている。大学に開設されている授業科目の履修に替えて検定試験の結果により単位を与えるこの方法は、意外にも主流を占めているようである。「意外にも」というのは、「学習機会の多様化」という制度の趣旨に合致しているのかどうか疑わしいからである。

この制度は、「大学は、教育上有益と認めるときは、学生が行う短期大学又は高等専門学校専攻科における学修その他文部科学大臣が別に定める学修を、当該大学における授業科目の履修とみなし、大学の定めるところにより単位を与えることができる」という大学設置基準第29条第1項を根拠にしている。多くの大学では、この条文の文言をそのまま引き写すような形で、学則中に規定している。「文部科学大臣が別に定める学修」については、平成3年文部省告示第68号（大学設置基準第29条第1項の規定による大学が単位を与えることのできる学修）第10号に規定されている。単位を与える要件として、TOEFLやTOEICと同等以上の社会的評価を有し、①国又は一般社団法人若しくは一般財団法人その他の団体が実施し、②学校教育法に規定する大学の目的に照らし適切な内容であり、③全国的な規模において毎年1回以上行われ、④実施の方法が適切かつ公正な知識及び技能に関する審査で、⑤大学において大学教育に相当する水準を有すると認めたものにおける成果に係る学修であることが求められている。

一般財団法人日本中国語検定協会の中国語検定試験（中検）は、前記①から④までの要件をすべて満たしている。問われるのは、大学がどのような基準で「大学教育に相当する水準を有する」と認めているか（前記⑤）である。中学校時代から学習してきた英語とは異なり、中国語についてはどの大学においても、一般的に入門

レベルの科目が置かれている。入門レベルの授業科目を置く大学が一般的である以上、たとえば「中検」準4級であっても、その合格をもって単位を与えることは是非に関する判断は、大学に任されているのである。すなわち、少なくとも中国語については、「どの級なら単位を与えてよいか」の問題は存在しないことになる。

しかし、教育上の位置づけについては、十分な検討がなされなければならない。制度の趣旨は、検定試験の「成果（合格）」に係る学修を当該大学における授業科目の履修とみなすことであり、単位の授与はそれに付随するものである。単位は「学修」というプロセスを評価して与えられるもので、決して「合格＝単位」ということではないのである。英語以外の外国語科目を置いていない大学に在学する学生が、課外で中国語を学習し、その成果を「中検」により証明したときに単位を与えるのであれば、この制度は十分に活かされる。逆に、中国語の授業科目を置く大学が、当該授業科目と同レベルの「中検」合格で単位を与えるものについては、注意が必要である。

授業を受けた上で、さらに「中検」を受験し、その合格を単位授与の要件とすることは、今回の範疇ではない。授業にハードルを設け、又は「中検」を当該授業科目の試験の一部に代用しただけのことだからである。問題となるのは、授業を受けることに代えて「中検」を受験させ、単位を与えることは是非である。たとえば大学入学前に4級に合格した学生に対し、それだけで「中国語Ⅱ」の単位を与えることは（入学前における技能審査の成果に係る学修に基づく単位授与が大学設置基準第30条第2項で認められていることは承知しているが）ほんとうに適当であろうか。その学生には「中国語Ⅲ」から履修する（「中国語Ⅰ～Ⅱ」の履修を免除する。）ことを認めればよいわけで、その単位分は別の学修をさせるべきではないか。また、「中国語Ⅱ」で4級の試験対策をして単位を与え、4級合格でさらに単位を与えるという重複した取扱いはいかがなものかなど、英語や他の外国語を含め、たびたび疑義が生じる導入例が見られるのは残念である。

「非難ばかりして、自分の大学はどうなんだ？」というご指摘を受けるかもしれないので、筆者の勤務先の状況について紹介しておく。筆者が着任した平成22（2010）年春の段階では、この制度が学則に規定されていながら、まったく運用されていなかった。このため、教務委員会で提案し、英語や情報処理技術者試験（独立行政法人情報処理推進機構）から制度導入に着手して、いまでは英語以外の4外国語などを含めて12種類の技能審査を対象としている。もちろん、すべての学部の学生に適用される。中国語の授業科目は「中国語Ⅰ」から「中国語Ⅳ」（中検4級レベルの内容）まで4科目8単位のみが置かれ、「中検」の受験・合格に基づく単位の授与は、3級以上としている。他の技能審査についても同様の考えが徹底しており、大学設置基準の趣旨を十分に理解し、活用しているつもりである。

「中国語Ⅳ」が終わったら、自分でどこかへ習いに行き、勝手に「中検」を受けて単位をとれとは無責任ではないかというご意見もあろう。大学の方針に基づく教育の範囲と、学生の自主的学修を支える制度の「すみ分け」とご理解いただきたい。

簡体字を正確に(続)

『中国語の環』編集室

先に「簡体字を正確に」と題して誤りやすい簡体字の筆順表を掲げたが(第93号)、そのうち特に誤りやすいものについて注意点を示すので、実際に書いて覚えよう。

() 内は日本の常用漢字です。

办(辦) bàn	㇏ ㇏ ㇏ ㇏	4画
	力を先に書いてから左右に点を加える。	
别(別) bié	㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏	7画
	左下は日本語とは違って力である。	
步(歩) bù	㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏	7画
	止の下は少ではない。	
查(查) chá	㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏	9画
	木の下は且ではなく旦。	
差(差) chà	㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏	9画
	第6筆は丿。“着”も同じ。	
长(長) cháng	㇏ ㇏ ㇏ ㇏	4画
	第3筆はし。	
场(場) chǎng	㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏	6画
	第4筆㇏は1筆で。	
车(車) chē	㇏ ㇏ ㇏ ㇏	4画
	第2筆㇏は1筆で。	
带(帶) dài	㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏	9画
	上部は𠂔であって、𠂔ではない。	
东(東) dōng	㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏	5画
	第2筆は㇏。第3筆㇏は下をはねる。	
骨(骨) gǔ	㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏ ㇏	9画
	第3筆㇏は1筆で。2筆の㇏とは向きが逆。	

[illegible]

教育・学習

『中国語の環』編集室(U)

前号(第99号)の「職業・労働・生産活動」に続き、今号は教育と学習に関する語彙を掲げる。

なお前々号までに取り上げた分類項目は、「身体部位の名称」(第94号)、「食べ物と飲み物」(第95号)、「家屋・家具・寝具」(第96号)、「交通・通信」(第97号)、「服装・履物」(第98号)である。

いくつかわかりますか？

以下はおよその目安です。

全部	40語以上	30語以上	20語以上
2級以上	3級レベル	4級レベル	準4級レベル
☐ 1. 文化	wénhuà	文化；教養，一般常識。	
☐ 2. 学校	xuéxiào	学校。(《所 suǒ》)	
☐ 3. 入学	rùxué	入学(する)。	
☐ 4. 毕业	bìyè	卒業(する)。	
☐ 5. 考试	kǎoshì	試験(する)。	
☐ 6. 留学	liúxué	留学(する)。	
☐ 7. 大学	dàxué	大学；総合大学， <i>university</i> 。	
☐ 8. 学院	xuéyuàn	学院；单科大学， <i>college</i> 。	
☐ 9. 中学	zhōngxué	中学・高校。	
☐ 10. 高级中学	gāoji zhōngxué	高等学校。略して〈高中 gāozhōng〉。	
☐ 11. 初级中学	chūji zhōngxué	中学校。略して〈初中 chūzhōng〉。	
☐ 12. 小学	xiǎoxué	小学校。	
☐ 13. 幼儿园	yòu'eryuán	幼稚園。	
☐ 14. 托儿所	tuō'ersuǒ	託児所。	
☐ 15. 夜校	yèxiào	夜学；講習会など。	
☐ 16. 功课	gōngkè	授業，課業。(《门 mén》)	
☐ 17. 作业	zuòyè	課題，宿題。	
☐ 18. 练习	liànxí	練習問題。	
☐ 19. 预习	yùxí	予習(する)。	
☐ 20. 复习	fùxí	復習(する)。	
☐ 21. 自习	zìxí	自習(する)。	
☐ 22. 辅导	fǔdǎo	補習(する)。	

□23. 老师	lǎoshī	先生。
□24. 校长	xiàozhǎng	校長，学長。
□25. 教授	jiàoshòu	教授。
□26. 副教授	fùjiàoshòu	准教授。
□27. 讲师	jiǎngshī	講師。
□28. 助教	zhùjiào	助手，助教。
□29. 学生	xué·shēng	学生，生徒。
□30. 同学	tóngxué	学友，同級生。
□31. 小学生	xiǎoxuéshēng	小学生。
□32. 中学生	zhōngxuéshēng	中学・高校生。
□33. 大学生	dàxuéshēng	大学生。
□34. 研究生	yánjiūshēng	大学院生。
□35. 硕士	shuòshì	修士。
□36. 博士	bóshì	博士。
□37. 师生	shīshēng	教師と学生。
□38. 校友	xiàoyǒu	同窓生。
□39. 家长	jiāzhǎng	(学童の)保護者，父母。
□40. 班主任	bānzhǔrèn	クラス担任。
□41. 哲学	zhéxué	哲学。
□42. 文学	wénxué	文学。
□43. 科学	kēxué	科学。
□44. 历史	lìshǐ	歴史。
□45. 地理	dìlǐ	地理。
□46. 数学	shùxué	算数，数学。
□47. 物理	wùlǐ	物理。
□48. 化学	huàxué	化学。
□49. 语文	yǔwén	国語。
□50. 语法	yǔfǎ	文法。
□51. 阅读	yuèdú	閲読。
□52. 作文	zuòwén	作文。
□53. 语言	yǔyán	言語。
□54. 普通话	pǔtōnghuà	共通語。
□55. 汉字	hànzì	漢字。
□56. 方言	fāngyán	方言。
□57. 外国语	wàiguóyǔ	外国語。略して〈外语 wàiyǔ〉。
□58. 体育	tǐyù	体育。
□59. 音乐	yīnyuè	音楽。
□60. 美术	měishù	美術。

絵で見る慣用語 (5)

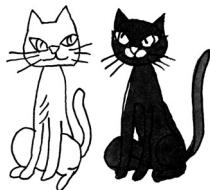
絵・張恢

文・『中国語の環』編集室



喝迷魂汤 hē míhúntāng

甘いことばにだまされる；甘言に釣られる。“迷魂汤”は地獄で人の本性を失わせるために飲ませるとされる煎じ薬。人を惑わせるうまいことば。惚(ほ)れ薬。



黑是黑，白是白 hēi shì hēi, bái shì bái

黒は黒，白は白；白黒（しろくろ）がはっきりしている，黒白（こくびやく）が明らかである。道理や正邪がはっきりしていて疑う余地のないたとえ。



后脑勺儿长眼 hòunǎosháo zhǎngyǎn

頭の後ろに目がついている；極めて機敏なこと，警戒心が鋭いことのたとえ。“后脑勺儿”は後頭部。“后脑勺子”（hòunǎosháozi）とも。



喝倒彩 hè dào cǎi

（観劇やスポーツ観戦時などに）やじる，やじを飛ばす。“叫倒好”（jiào dào hǎo）とも。“喝彩”“叫好”は喝采する意。★“喝”はhēではなく，hè。



恨铁不成钢 hèn tiě bù chéng gāng

鉄が鋼（はがね）にならないのを恨む；（能力があるのに発揮できず）進歩が遅いのを残念がる。いっそうよかれと願う。「やればできるのに」と人に奮起を促すときに使う。



护犊子 hù dú zi

（母牛が子牛をかわいがるように）自分の子供をかばう。自分の子供がけんかをした時などに，是非を問わずにひたすらかばうたとえ。



化干戈为玉帛 huà gāngē wéi yùbó
戦争をやめて講和する；戦争状態を平和な状態に戻す。矛を収め友好を結ぶ。“干戈”は盾（たて）と矛（ほこ）、武器。“玉帛”は宝石と絹布。古代、諸侯の間で贈答に用いた。



换口味 huàn kǒuwèi
違う味のものに料理を替える；口直しをする。（出し物などの）趣向を変えるたとえ。また、気分転換をする意にも。



火冒三丈高 huǒ mào sān zhàng gāo
怒りの炎が三尺まで上がる；烈火のごとく怒る。怒りが爆発する。かっとなる。単に“火冒三丈”とも。



画等号 huà dēnghào
等号で結ぶ；イコールにする。同等視する。“等号”は数学の等号。
两者并不能完全画等号。両者は決して同等視することはできない。



混日子 hùn rizi
ぶらぶらしていい加減に日を過ごす；その日暮らしをする。“混”はいい加減にごまかす、お茶を濁す。
咱们不能再混日子了。俺たちはこれ以上ぶらぶらしているわけにはいかん。



火烧眉毛尖 huǒshāo méimaojiān
眉（まゆ）に火がつく；危難・災いが身に迫るたとえ。足元に火がつく。焦眉の急。“眉毛尖”は眉毛の末端，眉尻。単に“火烧眉毛”とも。

“一A，就B”と“刚A，就B”

日本中国語検定協会評議員・文京学院大学 魯 曉琨

“一A，就B”と“刚A，就B”はいずれも「二つの出来事がごく短い時間間隔でおいて継起する」という意味を持っています。たとえば、

(1) a 弟弟一到家就抱起球出去玩了。

b 弟弟刚到家就抱起球出去玩了。

(弟は家に着いたら、すぐボールを抱えて遊びに行った。)

なお，“一A，就B”は条件関係も表しますが，ここでは触れません。

例(1)は確かにa，bとも用いることができますが，両者が互換できないケースが多数あります。ここでは島津（2004）を参考しながら，筆者の見解も加えて両者の構文や意味における相違点を解明しようと思います。

まず，Aの位置に入る動詞句を軸に，両者の違いを観察しましょう。

1. Aそれ自体が限界性をもっていない場合

(2) a (○)老师一讲，她就明白了。

b (×)老师刚讲，她就明白了。

(先生が教えた瞬間，彼女は分かった。)

(3) a (○)我心里一热，眼睛就有点儿湿了。

b (×)我心里刚热，眼睛就有点儿湿了。

(私は心が熱くなると，すぐ目が潤んでくる。)

例(2)の“讲”は持続できる動作であり，例(3)の“热”は形容詞であるので，どれも時間軸に沿った限界点をもたない非限界的な事象です。このような場合は“一A，就B”しか用いることができません。

しかし，例(2)(3)を(4)(5)のように直せば，状況は逆になります。

(4) a (×)老师一讲一遍，她就明白了。

b (○)老师刚讲一遍，她就明白了。

(先生が一回教えただけで，彼女は分かった。)

(5) a (×)我心里一热，就凉下来了。

b (○)我心里刚热，就凉下来了。

(私は胸が熱くなったと感じたが，すぐに気持ちが冷めてしまった。)

例(4)(5)のAである“讲”，“热”は(2)(3)と同じであるが，(4)では“讲一遍”の“一遍”が“讲”に限界性を付与し，(5)では文脈により“热”の終結を示し，限界性を付与しています。そのため，“刚A，就B”が使えるようになり，“一A，就B”は使えなくなりました。これはなぜなのでしょう。

同じAとBの継起を表すといっても，“一A”はAの始まりに焦点を当てて，“刚A”は終わりに焦点を当てていると言えます。つまり，“一A，就B”は「Aが開

始の最少量を経過したら、Bに入る」という継起を表します。“老师一讲，她就明白了”では先生の教えが始まったばかりで、彼女はすぐ分かったと言っています。“我心里一热，眼睛就有点儿湿了”では「胸が熱くなった」最初の瞬間を言っています。そのため、“一A”は限界性と矛盾しています。一方、“刚A，就B”は「Aが終わったら、すぐBに入る」という継起を表します。そのため“刚A，就B”のAが限界性を持つことが要求されるのです。

2. Aそれ自体が限界性をもっている場合

(6)a (○) 他一坐下，就和旁边的一个女孩儿说笑。

b (○) 他刚坐下，就和旁边的一个女孩儿说笑。

(彼は座ると、すぐ隣の女の子と話したり笑ったりしている。)

(7)a (○) 钱一进了口袋，老太太就高兴起来。

b (○) 钱刚进了口袋，老太太就高兴起来。

(お金が手に入った瞬間、老婦人は喜んだ。)

(6)(7)ではAである“坐下”“进了口袋”はそれ自体が限界性をもっています。“刚A，就B”のAは限界性を持つことが要求されるので、用いることができるわけですが、なぜ、このような場合、“一A，就B”も使えるのでしょうか。

限界性をもっているAは瞬間で終わる動作であるため、動作の起点と終点が重なるという特徴があります。そのため、Aの始まりに焦点を当てる“一A”と終わりに焦点を当てる“刚A”との違いが消えて、両方とも用いることができます。実はこのような場合、“一”も“刚”も省略でき、“就”のみでも表せます。

とはいっても、例(8)ではまた両者の違いが出てきます。

(8)a (×) 他一坐下一会儿，就和旁边的一个女孩儿说笑。

b (○) 他刚坐下一会儿，就和旁边的一个女孩儿说笑。

(彼は座って間もないうちに、すぐ隣の女の子と話したり笑ったりしている。)

“刚A”は終わりに焦点を当てるため、終わったあとの時間量が付いていてもかまいませんが、“一A”はAの始まりに焦点を当てるため、終わったあとの時間量が付いてはいけません。

また、“一A，就B”と“刚A，就B”は内在的な関連性も違います。“一A，就B”では事態AとBの間に内在的な関連性が存在していることが普通ですが，“刚A，就B”ではAとBの間に内在的な関連性がなくてもかまいません。たとえば、

(9)刚(×一)想去厨房做饭，电话就铃响了。

(台所に入って料理を作ろうと思ったら、電話のベルが鳴った。)

(10)刚(×一)进门，就有人敲门。

(玄関に入ったら、すぐ誰かがドアをノックした。)

例(9)(10)とも事態AとBの間に内在的な関連性がないので、“刚A，就B”を“一A，就B”に言い換えることができません。

参考文献

島津幸子 (2004) “一A，就B”形式と“刚A，就B”形式、『中国語学』第251号

字から詞へ

関西大学 沈国威

中国語の特徴の1つは、2500～3000の漢字で数万の常用語彙を作り上げていることである。では、字と詞はどのような関係にあるのか。それを把握することは、語彙、ひいては中国語学習そのものの成功のカギを握る。

中国語教育では、「字本位」と「詞本位」という2つの対立する教授法がある。前者が、漢字を中心にその発音、意味、そして用法（複合語を造ること、つまり造語法も含む）を教えていけば、効率的に中国語を習得できると主張すれば、後者は、複合語を基本単位として教えるべきだと反論する。両者はそれぞれ理に適う一面があるが、「本位」と強調した以上、どちらを取っても字と詞を分断させる恐れがある。筆者は、字と詞の間を自由に行き来する能力こそ中国語の語彙力であり、その秘密の通路を解明することが語彙教育の重要課題であると考えている。

漢字については、意味のあり方、文法機能、造語力の角度から把握する必要がある。すべての漢字に意味があるとは限らないことを認識しておくべきだ。“躊躇”“徘徊”などの連綿詞では、個々の漢字に意味はなく、2文字で初めて1語になることは一般に知られている。また使用頻度が低く、限られた複合語にしか現れない漢字は、母語話者を含め、意味把握の難しいものである。例えば、“趸dǔn货、兵燹xiǎn、挑衅xìn、和蔼ài、麻痹bì、奢shē侈chǐ、博弈yì”などである。

使用頻度の高い常用漢字でも、正確にその意味が言えないものがある。例えば“校”は、“校园、校长、学校、夜校”などの複合語に現れるが、意味ははっきりしない。“菠菜、渤海、范畴、华侨、彗星、楷书、昆虫、婴儿、苹果、荞麦、书肆、贪婪、哲学”などの下線の字も同じである。

外国人のために用意されている漢字リスト、例えばHSK漢字2905字のうち、上記のような意味が把握ににくい漢字は、数百ある。このような字は、いうまでもなく「字本位」教授法の対象とするのは不適當であり、複合語全体で覚えなければならない。それ以外の漢字は一応意味があるものになるが、文法上の振る舞いによって2種類に大別できる。

A類:単独で文の成分＝主語、述語、目的語などになれるもの。例えば“脸、脚；吃、喝；大、小；很、太”などである。このような漢字は、単音節語（或いは1字語）とも呼ばれる。古代中国語では単音節語が多く、ほぼ80%の語は単音節である。しかし現代中国語では状況が変化した。HSK漢字2905字のうち単独で使えるものは、1400字を超えない。単音節語は、動詞が最も多く、続いて名詞、形容詞、副詞の順である（筆者の調査では動詞：800、名詞：350、形容詞：220、副詞：50）。単音節語では基本語彙、特に話し言葉の語が大多数を占めており、語彙学習の中心となる。

B類:単独で文の成分になれないもの。例えば“颜、足；食、饮；巨、渺、颇”

などである。このような字は不自由語素と呼ばれる（以下「語素」と略称）。HSK 漢字の範囲内では単音節語と語素の数はほぼ匹敵しているが、字数が増えれば、増えた分は殆ど語素である。但し単音節語と語素の間に線を引くことは必ずしも容易ではない。一定の条件の下では語素も語のように使えるからだ。例えば、数量詞（一层、两倍、三室、四册）、方位詞（东面、北边、村里、地上）、補語（渡过去、购进、引来、移出）などを付ければ自由に使える語になるが、ふつう辞書には収録されない。つまり母語話者にとって1語意識が弱い。

語素に関しては、日本人学習者が特に注意しなければならないのは、日中間のズレである。「はしる」を「走る」、「たべる」を「食べる」と表記するのは、日本語の字訓であるが、日本語の字訓は、古代中国語の状況を反映したものが多く、そのまま現代中国語として通用しない。例えば、現代中国語では、“我食”“他言”“距离遥”などとは言わない。

B類の漢字は、単語より小さい単位になるので、語彙教育の対象ではないが、他の漢字との意味関係によって以下のような2つのタイプに分けられる。

(1)A類字と同義関係にあるもの。例えば、“餐、食=吃；巨、宏、伟=大；颜、颊jiá=脸；颁=发、分；炊=烧、煮；壁、垣=墙；币、帑tǎng=钱；舶=船；饮=喝；碧=绿；糙=粗；呈=献；抵=挡；奠=祭；达=到；缓=慢；恭=敬；绘=画；借=贷；赁=租”などである。1対多の場合もあれば、1対1の場合もある。このような関係にある漢字の数量は、個人の漢字知識にもよるが、数百組に上ると考えられる。このタイプの漢字について、単音節語と語素の意味上の関連性を明示しておくことは効率的な語彙拡大につながる。例えば、“吃”や“大”を教える時、“餐、食”や“巨、伟、宏、庞、硕”を同時に提示すべきである。非漢字圏の学習者にとっては負担となることもあるが、日本人学習者にとってはむしろ好都合である。

(2)同義の単音節語は存在しないが、同義、或いは近義の語素を持つもの。例えば、“档一案、堡一垒、臂一膀、部一分、材一料、仓一库、畅一快、嫉一妒、陶一瓷、卑一鄙、陋；场一所、地；逞一炫、耀”などである。このタイプの字は、よく同義、或いは近義の成分による並列構造の複合語を構成するので、個々別々ではなく、同時に、つまり複合語の形で相乗効果により字の意味を定着させるほうが良いだろう。

顕著に見られるこのような語と語素の関係は、言語の古今変化の結果だけではなく、造語の上で、なくてはならないものであろう。語と語素の意味による関連づけは、既存語の理解と新語の創出に深く関わることは仏典、近代の西洋書翻訳史を見れば分かる。

現在、漢字表と語彙表が別々に用意されているが、それは字と語の関連性を薄めることになる。筆者は次のような学習字詞表によってそれを改めようと考えている。

語素	単音節語	複合語
顔、面、颊	脸	面部、顔面、脸颊、面容
食、餐	吃	食用、用餐；食堂、餐厅
巨、伟、庞、宏、硕	大	巨大、伟大、庞大、宏大、硕大

数字語を覚えよう(続)

日本中国語検定協会評議員・共立女子大学 李鍾強

今回は前回に引き続き日常でよく使われている数字語を拾ってそれぞれの特徴を見てみよう。

“六”で合成された語が少ないようだが、その派生義が発生しにくいことが原因であろう。“六亲不认”(義理や人情を少しも考えないほど冷酷だ)という成語があるが、この“六亲”は「父・母・兄・弟・妻・子」の総称として、親族や親戚を指しているのである。“六神无主”は驚いたり慌てたりして思案の定まらない様子を表す場合に用いる語である。この“六神”はもともと道教で心・肺・肝・腎・脾・胆を言うが、広く精神状態を指す。類義語として“六神不安”もある。

“七”を用いた語は少なくはないが、他の数字と一緒に用いることで慣用語となり、数量の多いことを表し、とりわけ“七…八…”の形で表現された言葉が最も多く見られる。“七嘴八舌”は大勢の人が、がやがやしゃべるさま、“七上八下”は胸がドキドキする、“七长八短”は長短ふざろいなさま、“零七八碎”はこまごまとしている様子、“乱七八糟”はめちゃくちゃであるさまを指している。いずれもマイナスイメージを伴うニュアンスを帯びていることが特徴と言えよう。

“八”と組み合わせた慣用語はマイナスニュアンスまたは否定的な役割を果たしているものが多く見られる。八方美人は“八面玲珑”，互いに大した違いのないことは“半斤八両”，でたらめを言うことは“胡说八道”，目鼻もつかないことは“八字没一撇”とそれぞれ“八”を借りた比喻表現である。

“九”は“一位数”(一けたの数)の中で最大の数であるため、古来よりこの上ないこと、最高であることを表すので、宮廷儀礼の中で最も尊ばれる数字となった。紫禁城を見学された方ならご存知のように宮殿の数や階段の段数などはいずれも“九”という理念が表されているものである。そして“九”で表現された成語を調べてみると「最高の…」という意味を表す語が数多く存在することが分かる。“九霄云外”(雲のかなた)の“九霄”は「天」の最も高い所、“含笑九泉”(あの世で微笑む)の“九泉”は「地」の最も深い所を指している。他に、“九死一生”(九死に一生を得る)、“九牛一毛”(九牛の一毛)のように最多の“九”を最小の“一”と組み合わせた成語もあるが、日本人にも馴染みやすい対照表現である。

“十”は数字の十だが、“一位数”をクリアして“十位数”に入ること、成語の中で「長い」「十分だ」という意味を派生する。例えば、“十年寒窗”(長い間勉強にいそしむ)の“十年”は「長い年月」，“神气十足”(生意気である)の“十足”は「十分だ」というニュアンスを有する。他に、“十”は「円満」まで意味拡張することもあるが、どんなことでも完璧にクリアした場合に“十全十美”(完全無欠である)と表現してみてもいいかだろうか。

日中の文化交流の架け橋を目指して

荒井智晴

私が中国語を学び始めた時期は、主に大学に入ってからである。

幼い頃より横山光輝氏の『三国志』や『チンギス・ハーン』等の中国歴史伝記シリーズを読み漁り、その壮大な世界観と英雄譚に心躍らせた。歴史や文化が深い国で非常に魅力的な国にみえた。

今までも大学での履修や趣味程度で中国語を勉強してはきたが、使用する機会も皆無であったために、無為に月日が過ぎた。実際に現地に赴いたのは、私が21歳の時であり、父の中国視察の御供としてついていった時である。中国は完全なる異国として目にうつった。

中国の市場は非常に活気があり、個人の強さが際立つ環境に感じた。彼らは本気で生きているので、なんだか羨ましく感じた。私は人生に対し、こうも彼らのように真剣に生きてきただろうか。現地の熱気に触れ、当時は使いこなせなかった中国語も真剣に取り組もうと決心できた。

私はその後、北京、西安の大学に留学し、中国国内を旅行して見識を精力的にひろめた。その旅行記を投稿したものが『地球の歩き方』で何度か取り上げてもらえたので、自分の経験が人の御役に立てて嬉しかった。卒業後は縁があって台湾へ働きに出かけた。教科書的な言い回しと当地での日常会話は全く違い、地域によっては通じない言い方もあり、巻舌音も必要ないと強制され、良くも悪くもすべて経験になった。休日は中国映画が大好きであったので、映画館に足繁く通った。そこで運よく台湾のテレビ関係者とも知り合いになれたことから、台湾の番組にも出演する機会が得られた。縁や運も大事だが、台湾で人生は本気になった者勝ちであると、さらに確固たる自信がついた。

現在私は、日中両国の文化交流を促進する団体で働いている。メール、翻訳、通訳、著名人のアテンドなど、多岐にわたり中国語を使う機会があり、大好きな映画関連も勉強できることから、天職だと感じている。日々新しいことの勉強だが、毎日1時間は中国語を勉強する時間として確保している。目下中国語検定準1級合格を目指して励んでいるが、語彙力や文法、故事成語などを学ばないといけないので忍耐力が問われる。

勉強に終わりはないし、めげることもあるが、あの中国の熱気を思い出すと何事にも本気になれるのだ。今まで出会った人たちから多大な御恩を頂いたので、その気持に報いるためにも、日中文化交流の架け橋になることを目指して励むことで、絆を深めていきたい。

編集後記

編集を終えてはじめて気がついたことですが、『中国語の環』は今号で1987年9月の創刊以来100号を迎えます。当初は年4回刊行、会員購読制でしたが、のちに年3回に改め、誰でも読めるように「受験案内」に綴じ込むことにして今日に至っています。

87年12月刊の第2号の「受験者の声」欄に北村亮介さんの次のような文章が掲載されています。同号の「編集後記」にあるように、28年前の文章ですが、今なお、『中国語の環』が、また協会の仕事はどうあらなければならないかを代弁してくれているように思われます。再録して100号の記念とさせていただきます。

(上野記)

「中国語の環」について

中国語という言葉は、少くとも今50歳を越えている年代の人達にとっては、戦争、そして戦後という必ずしも明るくない生活体験とオーバーラップし、それが中国語のできる日本人の間に一つの連帯感を形成し、ある種の「中国語の環」ができていくように思います。

然しこれからの中国とのかかわり合いは、こうした過去のしがらみからの脱皮が求められます。日本のためにも、中国のためにも、もっと新しい感覚をもった、明るく、フランクで、若々しい人達の間に「中国語の環」が形成され、日中関係のリード役を務めて行ってくれることが望まれます。

中国の人達と冷静に、而も温かくつき合って行けるような国際感覚を備えた若く優秀な人材がより多く中国語を習得し、「中国語の環」に加わってくれることが、明日の日中関係のために、とても大切なことと思われます。

(1級合格 北村亮介)

『読者の広場』への投稿を募集しています。中国語に関すること、検定試験に関することなど、400字～1,000字程度でお寄せください（Eメール、郵便ともに可）。採用された方には、記念品を進呈します。

なお、ご投稿いただいた原稿を掲載するにあたり、編集室側で若干の加筆・修正をさせていただきます場合がございます。予めご了承ください。